

国際政治学の来歴について

大賀 哲

1. 政治学

- 政治学を「政治制度や政治概念についての思惟」と定義するならば、その歴史は非常に古い—プラトンから数えて 2500 年。しかし、制度的学問としての政治学の歴史はきわめて浅い（1880年に最初の政治学部がコロンビア大学に、1919年に最初の国際関係学部がウェールズ大学に設置される）。
- 政治学の「担い手」の変化: 哲学者⇒神学者⇒法学者⇒政治学者

政治学の特徴

- 政治学は人間を「集団」としてみる(国家、民族、宗教、企業、団体)。個人に着目する場合でも、その個人と集団との関わりかたを問題にする(道徳と政治の違い)。

- 道徳と政治の違い

道徳言説・・・「人格的対話」である

政治言説・・・「公衆や共同体に関与するもの」である—政治的言説は「観点の多元性」を求める

- 秩序と権力—政治学の主題

秩序・・・人間関係と人間行動のあり方を、規定している構造や制度、活動、実践の集合

権力・・・他者に特定の行動を行なわせるための手段

秩序も権力も一人の人間の中には存在しない。二人以上の人間がいて初めて存在する。

自己と他者の存在＝他者とどう向き合うのか？対立と差異。

政治学の主たるアプローチ

■ 分析対象による区別

—広義の分類—

政治哲学・・・政治の望ましいあり方を研究

(=政治学史、政治思想史、政治理論)【哲学・理念】

政治過程・・・政治現象の記述

(=政治史、政治過程論、比較政治、国際政治)

—狭義の分類—

政治学史・・・政治学の概念・理念の変遷(狭義には学説史の変化)を捉える: 政治思想史との区別が曖昧

政治思想史・・・政治という／政治についての概念・理念の変遷を問うもの

思想家を対象とする研究と、概念を対象とする研究

政治理論・・・とくに政治概念、政治理念の規範的な内容を問う

(歴史的な変容は前提とされない場合が多く、概念の普遍性を問題とする傾向)

政治史・・・政治現象の歴史的な変容・事実関係・因果関係の検証

政治過程論・・・(主として一国内における)政治現象の変遷を検証する。政治学史も広義には過程論であると言えるが、政治過程論といった場合に歴史的な研究は含まれない場合が多い

比較政治・・・二国間以上に共通する政治現象の比較。現実には政治過程論の色彩が極めて強い

国際政治・・・二国間以上にまたがる政治現象の解明(詳細後述)

■ 分析方法による区別

規範理論 (Normative Theory)

政治における特定の概念・現象に着眼し、その望ましいあり方を考察する

経験理論・政治科学 (Political Science)

主として因果関係・事実関係を分析し、そこから政治における一般法則を導き出そうとする立場

- * 社会学・経済学・統計学・心理学などの影響が強い
- * Is/Ought (政治はどうなっているか or 政治はどうあるべきか)
- * 政治学における歴史アプローチ vs 科学的アプローチ
- * 「理念」としての政治学と「分析」としての政治学

政治的な概念の特徴

○ 政治的な概念は歴史的な概念である(政治学における問いと回答)

政治学(および社会科学一般における)問いと回答の特徴

ある問いが立てられ、それに回答が与えられることによって(問題が解決されることによって)、問題設定が変遷していくのではなく、時代状況や政治状況の変化に伴って「問いの立て方」が変わっていく(例:ナショナリズム、国家論)

2. 国際政治学

二国間以上にまたがる政治問題を解明・思考する領域。国家間の秩序と権力の問題領域

ウェールズ大学アベリュースミス校(1919年)に世界で最初の国際政治学部(制度的な国際政治学の開始)⇒当初は「戦争と平和」の政治学

- * 国際政治学自体は20世紀の産物だが、その萌芽は以前から「外交論」や「政治哲学」として存在していたと考えることもできる。
- * 国際政治学も「政治学」である(国内)政治学において問題となっていた秩序と権力が主題と成らざるを得ない⇔国際平和ないしグローバル正義の幻想
- * 伝統的には国際政治学が、国際法学・外交史・安全保障研究等の諸分野から独立して成立し

た(当時の文脈は第一次大戦後における戦争の原因の究明とその除去)。

- * 伝統的な定義は、二国間以上にまたがる(国際的な)、政治問題の探求である。
- * 「伝統的な」というのは世界政治の変動に伴って国際政治の分析対象も変化するからである。国際問題には、関連する国内問題も含まれ、さらに政治学的な分野に限らず、法学、経済学、社会学、歴史学、心理学、軍事学に及ぶ学際的な領域。

国際政治学における認識の変容—高度の政治(high politics)と低度の政治(low politics)

高度の政治・・・外交や安全保障などの国家の存亡にかかわる問題

低度の政治・・・経済や社会など(主として)国内問題を対象とする領域

かつては国際政治＝高度の政治、つまり「国際関係＝国家間関係」という図式があった。1970年代以降、経済的相互依存の進展に伴って、低度の政治への探求が開始される

国際政治学と国際関係論

国際関係論(International Relations)と国際政治学(International Politics)の用例は論者によって様々であり、確立した区分・定義は存在しているとは言い難い。傾向として、高度の政治に属する研究者が国際政治学を、低度の政治に属する研究者が国際関係論の名称を用いる傾向があるが、一般化できるほどではない。

伝統的な国際政治秩序＝ヨーロッパ公法(または古典外交時代)

ウェストファリア体制＝1648年のウェストファリア条約

国際政治学における「近代(modern)」の始まり

主権国家を基本単位とする国際システム(International system)

ウェストファリア型国際システムの特徴:①国家の上位権力の不在(たとえば世界政府)②無政府状態が国際システムの本質であるため、国家の生き残りとそれを保障するための外交と安全保障が最優先の課題となる

新しい国際政治秩序＝国際社会(またはポスト・ウェストファリア体制)

■ 戦間期(1919～1939年)の議論

勢力均衡論から国際社会論へ

第一次世界大戦の衝撃(古典外交と勢力均衡の崩壊)

なぜ第一次世界大戦は起きたのか? 戦争を防ぐための方法?

国際平和を実現する秩序の考究 国際連盟・国際法・国際政治

戦間期理想主義(自由貿易論と国際平和論) 功利主義とベンサム主義

戦争違法化の思想⇒戦間期理想主義(リベラリズム)⇒第二次大戦による挫折

宥和政策の失敗(ミュンヘン・ショック)⇒リアリズムの復権

■ ポスト・ウェストファリア(1970年代以降)の議論

80年代以降の国際的相互依存—非政府組織・多国籍企業・国際機関

経済的相互依存の深化に伴う安全保障問題の重要性低下

- 経済的相互依存の定義 (Robert O Keohane Joseph S Nye, *Power and Interdependence*, Little Brown, 1977.) ①「アクセスの多様性」Multiple channels to access ②「軍事力の地位低下」Minor role of Military ③「政策優先度の流動化」No hierarchy among issues
- 国家の流動化＝グローバル化との緊張関係
- 国家とは・・・主権を有する統治機構により支配された一定の領域と住民の総体
- 国家の三要素＝主権・領域・国民

⇒ポスト・ウェストファリア体制の展開による国家の地位低下

⇒グローバル・ガバナンス(政府なき統治)

国際政治学における主要理論

国際政治学理論とは世界秩序(複数国以上にまたがる一定の制度や規範)

- リアリズム・・・世界秩序を国益と権力の力学から説明し、国益を守るために国家が権力闘争を繰り返すと主張する。対外政策を重視する「古典的リアリズム」と国際システムを重視する「ネオリアリズム」に大別される。
- リベラリズム・・・世界秩序を制度や法規範によって説明する。国際制度や国際レジームの存在によって国家間協調が可能であるという立場。戦間期理想主義に端を発し、相互依存論や国際レジーム論等の学派に分かれる。
- マルクス主義・・・世界秩序を主に経済要因から分析する。従属理論は先進国と途上国の依存・従属関係に着目し、世界経済の構造が先進国と途上国の経済格差を生み出していると主張する。世界システム論はさらに、先進国と途上国の格差を生み出しているグローバル資本主義が世界秩序そのものを規定していると主張する。
- 構成主義・・・世界秩序を理念から説明する。特定の集団の中で知識や規範がどのように付帯・定着・変容しているのかに着目する。

国際政治学の形成史

今日のような国際政治学が始まったのは第一次世界大戦後

—政治哲学との合流—

リアリズム⇒トゥキディデス、マキアベリ、ホッブズ

ユートピアニズム(理想主義)⇒ベンサムとカント

- 第一論争 理想主義 vs リアリズム (1940年代)

ウィルソン主義(旧外交から新外交へ)

リベラリズム(戦間期理想主義)正戦論の復権、戦争違法化

リアリズム—国家間の利害関係を基調とする

⇒宥和政策の失敗

○ 第二論争(1960年代) 古典的リアリズム vs ネオリアリズム

対外政策論から国際システム論へ

行動科学の影響を受けたネオリアリズムと歴史・哲学を重視する古典的リアリズム

国際政治学の行動科学化(科学革命 1960年代—)

○ パラダイム間論争(1970年代) リアリズム vs リベラリズム vs マルクス主義

○ ネオ・ネオ論争(1980年代) ネオリアリズム vs ネオリベラリズム

リアリズムでは権力を主要な概念としており、リベラリズムでは協調を主要な概念としている。

アナーキー(世界政府なき国際秩序)における国家間協力は可能か?

⇒ネオ・ネオ統合 アナーキーにおける国家中心主義・合理主義・実証主義の隆盛

○ 第三論争(1980年代～90年代)

実証主義に対してのポスト実証主義(構成主義諸派)の台頭

- ・ 実証主義の想定では、国家が利益の最大化を狙って権力闘争を繰り返すため、実証主義の方法論では「なぜ国家がそのような行動を選択するのか」といった因果関係や相関関係の分析が中心となる。そしてその因果関係に一般法則を見出そうとする。物質要因の分析⇒軍事力、経済力など指標化可能なもの。
- ・ 国家がなぜ特定の理念やイデオロギー、アイデンティティに着目するのかに主眼を置く。つまり国家が特定の行動を選択するのは、物質的な利害関係からではなく、国家のもつ理念やイデオロギーに背景があると考え。非物質的要因(idea)の分析⇒理念、言説、思想など指標化不可能なもの

日本の国際政治学

【戦前の文脈】

国際法学と外交史学の棲み分け(国際法学会)

【国際秩序】帝国間関係 と 【帝国秩序】帝国内関係

国際法学・外交史学 植民(殖民)政策学(行政学的・経済学)⇒国際政治学として一本化

旧帝国大学における「法」学部の位置づけ

【戦後の文脈】

国際政治学会が成立(1955年)←実態は「日本外交史学会」国際法学会からの分派

当初は「太平洋戦争の原因」論＝外交史研究の活性化

1960年代以降、アメリカ帰国組が Political Science の手法を導入して、理論研究が開花する

1990年代以降、トランスナショナル関係論

日本に於ける現代の体系的な分類は①理論研究、②歴史研究、③地域研究、④トランスナショナル関係論

伝統的に日本の国際政治学は歴史学と地域研究の色彩が強い